ニューサウスウェールズ（NSW）州教育省訪問

城北中学校・高等学校　情報・視聴覚指導部長　井上 昭雄

１　はじめに

2019年9月9日午後、私立学校教員海外研修団は、ニューサウスウェールズ(NSW)州の教育省を訪問した。ここでは、州内公立学校におけるICT教育についてプレゼンテーションをしていただいた。

シドニーがあるNSW州の公立学校では、生徒が一人１台のデジタルデバイスを持って授業に利用することが一般化されており、学校に据え置きの共用型や自分の持っているデバイスを活用するBYOD型のどちらかの形で、授業で活用しているとのことであった。

考え方の基本にあるのは、テクノロジーは、教員の労働を楽にするためのものであるべきで、教員の指導を支えるもの、教員の授業を助けるものではなくてはならないということだった。

２　アプリケーションについて

生徒と教員の間の交流ツールとしては、利用しやすい簡単なツールでなくてはならないということで、Pea Deck foe microsoftというアプリを利用しているとのことだった。これは、教員が生徒に質問を配信し、生徒が作った答案、解答、提出物を、教員が採点、評価、評価の管理を行うことができ、生徒同士で解答を共有することも可能なツールで、授業の様々な場面に応じて使い分けているということであった。

教員同士のコミニュケーションツールとしては、Google classroomを授業のための教材の構築、連絡などに利用していた。私もこのアプリは利用しており、無料かつフレキシブルに使っていくことのできるツールであるので、利用することのメリットは十分あると共感した。

３　授業について

生徒が受ける授業に関しても、様々なものを提供しているそうである。例えば、数学の授業で、ロボット工学と数学を融合させるなど、教科を超えた横断型の授業がある。レゴマインドストームというアプリでプログラムを作り、ロボットを動かすことで、円周の公

式を確かめるなど、教員がただ教えるのではなく、生徒が自分で考えることに意義がある授業となっているということである。

また、オーストラリアのアボリジニの歴史を学ぶために、それに関する動画を作成する授業では、動画を作るためには自分たちで調べなければならないし、動画の編集もしなければならない。動画を作ることは歴史とは直接関係ないが、ICT機器を使って調べたり発表することができる。ICT機器は、生徒の学習を支えるツールとして必要なものと考えているとのことだった。

４　教員研修について

NSW州の教員全員がICT機器を利用するために、教員研修を積極的に行なっているとのことだった。州では、たくさんの授業のコンテンツを準備し、教員は動画で使い方などを見ることができるようになっている。例えば、Linda.com という教員研修のプログラムがあるが、教室で活用できるアクティビティプログラムが豊富にあり、教員は自由に利用することができる。

なお、ICTの授業を維持し、学校から支持されるために、州の担当者が学校を訪問して研修を行い、その学校特有のニーズに応えられるようにもしているとのことであった。

授業で一番大切にしているのは「コミュニケーション」であり、それを活発にさせるために、教員に対してグループワーク、PBL(Project Based Learning)、プレゼンテーションの研修を頻繁に行うということであった。レクチャー型の一斉授業では、生徒の探究心が育ちにくいとされており、教員がコミュニケーションを取りながら生徒の探究心を育ていくことで、自発的に学習する人間を育てていけるのではないかと考えているそうである。

私たち教員は､知識偏重型指導において教育を受けていたバックグラウンドがあるので、そのような指導になりがちである。教員がしっかり教えることで生徒は成長し、教員はそのために存在しているという発想は、オーストラリアにはあまりない気がした。学習は、あくまでも学習者の課題であり、教員は補助者として生徒の探究心を芽生えさせるのが仕事で、学習者が学習するかどうかは学習者次第ということなのだろう。生徒が成功や失敗をするのは生徒の課題で、教員はサポートやアドバイスをして生徒の成長を補助する立場にあるのだということだ。これは、個人主義、自己責任の考え方に基づいているように感じた。

５　学校選択について

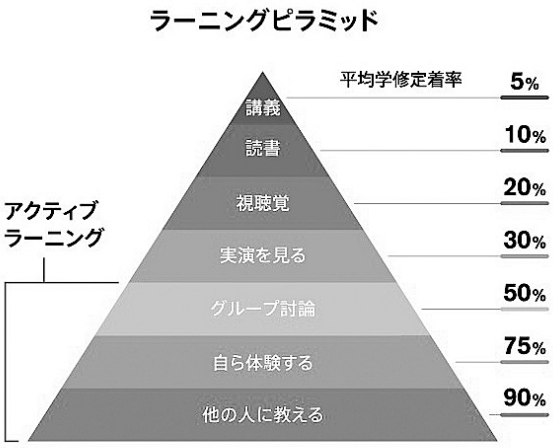
学校選びに関しては、日本では「大学進学」という成果を期待して学校選びをする保護者が多いが、オーストラリアにおいてはどのような選び方がされているのか、質問をしてみた。

オーストラリアでは、卒業後の大学進学の調査は原則行わないそうで、どの高校からどの大学に合格したかという情報で学校選びをすることはないとのことであった。あくまでも、学校でその生徒がどのような取り組みをしていたかで選ぶということだ。前述したが、どこの大学に進学したかは、進学した生徒の成果であって、サポートした学校の手柄ではないということなのだろう。

保護者は、純粋に学校での「学び」を意識して学校選びをしているのだと感じた。最善、最新、効率的、魅力ある授業をどれだけ行っているかで学校の良し悪しを図ることは、これも本来の姿のように思えた。

６　終わりに

日本の学校との違いを強く感じたのは、インフラに関してであった。オーストラリアの学校では教室のサイズがコンパクトで、１人の教員がみる生徒の人数は多くても 25 名程度だった。授業のスタイルも大きく異なり、プロジェクト型学習が主で、レクチャー型の授業はほとんど行われていなかった。プロジェクト型学習にはデジタルデバイス（iPad や PC）は必要不可欠だが、オーストラリアの生徒は「文房具」として利用していた。また、机や椅子も、配置や移動が自由にデザインでき、床が絨毯敷きのため、床に座ってグループワークをしている様子も見受けられた。



出典:The Learning Pyramid. アメリカ National Training Laboratories

日本のクラスは30～40人で、レクチャー型の授業が主流である。教室もそれに適したサイズで、教室インフラや構造もレクチャー型に向いている。40 人という人数はグループワークやプロジェクト型学習に不向きな人数であり、それを行おうとすれば相当な力量が教員に要求される。

１ 人の教員がみる生徒の数が、オーストラリアに比べて日本はかなり多い。公立は改善してきているが、私学は人件費の問題もあり、改善はなかなかできていないという状況である。そんな中で日本の教員の多くは、授業スタイルや教授法を変える必要性を感じていない。それは、教室のインフラや生徒の人数から考えると、レクチャー型がベストな方法であると感じているから

だと思う。しかし、レクチャー型は、学習者の学習意欲を最も引き出しにくく、学習効果が最も少ない方法だと言われている。

現在のインフラで、欧米型の教育スタイルを採用していくには、多くの教員が相当な力量を持つことが必要とされ、現実的ではない。アクティブラーニングやPBLを日本の教育にもっと取り入れていくためには、学校のインフラを積極的に変えていかなければ難しいと感じた。